

初夏の里山は生き物があふれていた

里草会顧問 福井正樹

子供の頃の里山には、今とは比べ物にならないほど生き物で賑やかだった。田植えが終わった頃の水田の水の流れおちるところを見ていると、アルミの1円玉のようなフナの稚魚が何本も数珠つなぎのように遡ってゆく。琵琶湖でも稚アユなどが小川の水かさが膨らむように遡っていったという。山田の周辺には、田の土手にも谷にかぶさっている木の枝にも、綿菓子のようなモリアオガエルの卵塊がぶら下がっていた。これらが次々に田の水面にオタマジャクシとなって落ちてくる。

当然水の中はオタマジャクシで一杯になってしまっていて、足を踏み入れると踏み潰すほど群がっている。こんな時期にはゲンゴロウやミズカマキリやタガメなどもいっぱい生息していた。最近湯の山温泉の奥の宿に泊まった時、風呂桶ほどの池の上にかぶさっている木の枝に、モリアオガエルが卵を産むのだという。フェンスで囲ってあって、大切に守られていた。子供のころは山田のそばを歩くとモリアオガエルの卵塊をしょっちゅう踏みつぶしたものだ。最初は綿菓子のように白く輝いているが、卵が孵る頃になると薄茶色の痰のようになってくる。感觸的に嫌だった。

このころの山田は1970年ごろに作付けをやめてしまい、杉などを植林した。先祖が営々として守ってきた田のあぜはたちまち崩れ土は流され、川筋は気ままに流れ下り、大小の岩が露出して水路を堰きとめている。薄暗い林床にはモリアオガエルの姿もまったく見ることができなくなった。踏み潰すほどいたオタマジャクシも当然見ることはない。里山の生き物が減少したのは山田の放棄と農薬や化学肥料の施用によると共に、基盤整備の進展がある。土地改良事業により、水路と水田の高低差が大きくなったうえに、水路が塩ビ管などになって埋設され、更に水管理が容易になって土用干など稲の倒伏を防ぐために簡単に乾田化できる。排水路も深いU字溝やセメント作りになって落ちた生き物は這い上がることはできない。死の世界が広がってしまうと、誰も水田の生物などに関心を持たなくなってしまう。

小学3年生の頃叔父が離れを建てて移ったので、その後の部屋をもらった。母屋と倉を繋ぐ廊下に面した小部屋で、掛け出し屋根が張りだして薪小屋にもなっていた。このトタン板にさび止めのためにコールタールを塗ったことがある。夜寝るころにこのトタン屋根に小石が投げられたようなばらばらという音がする。翌日はしごをかけて覗いてみると、乾いていないコールタールに一杯虫が張り付いている。大きなものではゲンゴロウやタガメ、小さいコオイムシやマツモムシやミズスマシやアメンボウなど、とても沢山の水生昆虫がくっついていて、月夜の空は水棲昆虫が乱舞していた。

たぶんコールタールが月光に反射して白く光っているのを水たまりと勘違いしてこれらの虫は飛び込んできたのであろう。その後乾燥して粘りが無くなってからでも、時々音はするのでやはりゲンゴロウなどが水と思って飛び込んでいたのであろう。この部屋では私

はいろんなものを収集したり飼ったりしていた。昆虫の標本も作ればビンに蟬を流し込んであかりにしたり、珍しいと思った小石なども箱に入れていた。あるときその周りを見慣れない虫が何匹もおぼつかない姿で這っている。持っている小さな昆虫図鑑で見ると、最もナンキンムシに似ている。祖父たちにナンキンムシがいるようだというと、あれに刺されるとすごくかゆいという。当時蚤は結構いて、DDTなどで退治していた。その当座はだいぶ不安であったが、そのうち忘れてしまった。

ずいぶん後になってこれはタガメの孵化したばかりの幼虫だったので分かった。田植えの最盛期は学校も休みになって手伝われる。まず朝早く苗取りをする。その時苗数本に腕時計のバンドをしたように帯状の粒粒がついているものがある。米粒より少し大きく小豆ほども大きくない紡錘形の茶色の縦縞模様のある粒がびっしり詰まっている。年に数個は見つけたが、誰に聞いても何なのかわからない。たまたまそれを持って帰って標本などの入れ物に入れたまま忘れていた。それがタガメの卵塊だったので。

タガメは当時たくさんいた。夕食の時裸電球に飛んでくると、すごい迫力だ。ブリキの電球の笠から埃が立ち上り、電球の光が隠れてしまうくらい大きい。田んぼや水遊びの時も咬まれると痛い。関東では「ちんぼきり」と言って怖がったとのことである。その後タガメのことはいろいろ知ることができるようになった。あの卵塊の下には雄がいて、時々登って水をかけて掃除をしたり太陽の光を遮り護っているのだという。そしてこの雄を取り除いてしまうと、卵塊は干からびてしまっただけで孵化しないのだそうだ。だとすると私が持って帰ったものは孵化間近のものだったのであろうか。

この卵一粒はとても弾力があって、子供の指では潰せなかった。何かで磨り潰すとどろっとした青みがかかったゼリー状のものが出てくる。卵を固定している帯状のものは結構粘りと弾力があり、卵の粒はこれにしっかり埋め込まれている。タガメの雌は交尾して卵を産み付けてしまうと、それを雄に託して別な雄を探しにいく。卵塊を護っている雄は別なメスが現れても交尾をしない。雌の方が体格が大きいので、雄の護っている卵を噛みつぶしたり壊してしまう。そうするとオスは再び交尾してその雌が産んだ卵をせっせと守るのだそうだ。このような現象は哺乳類にもあり、ライオンがハーレムを乗っ取ると前の雄の子供を殺し、雌が発情すると交尾する。

里山の春は生き物に満ちていたが、春に生まれたものは皆小さい。小さなオタマジャクシを小さなタガメの幼虫が食べて、どちらも成長してゆくのだ。コオイムシやミズカマキリも小さい。クモもカマキリもバッタも小さい。これらが食べられながら食べるものが育ち、カエルなども食べられなかったものが大きく成長して次の世代を残してゆく。

タガメはマムシでも食べるという報告も写真もある。筋肉などを溶かしてしまう消化液を注入して、どろどろになった液状のものを吸収するのである。この液には神経毒も含まれていて、獲物は体が動けなくなってしまう。ホタルなども外消化で、巻貝などを溶かしてその液状のものを吸収している。豊富にいた里山の生き物たちが貧弱になってしまったのは、苗代を作らず機械で田植えをするなど栽培技術の変化も一因である。